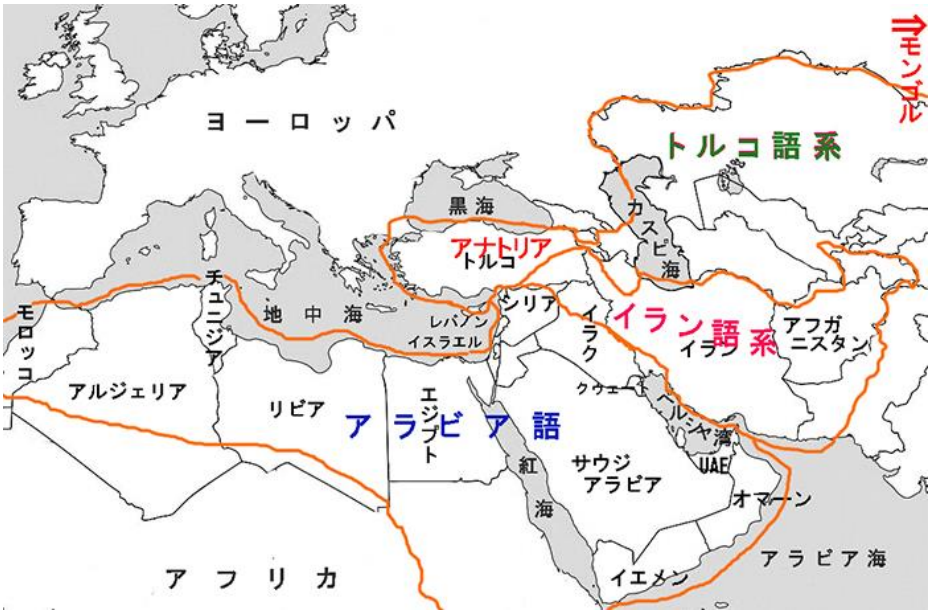
4　中東の言語と民族

第一回目の授業で中東各国をさまざまな指標で比較し、トルコ、イラン、エジプト、サウジアラビアの 4 か国が中東世界をリードする大国であることがわかったが、この 4 カ国はまた中東および中央アジアにおける**3 大言語グループ**を代表する国でもある。エジプトとサウジアラビアはアラビア語、トルコはトルコ語、イランはペルシャ語を公用語とし、言語系統を異にしている。

中東・中央アジアの言語分布

言語学の分類に従うと、中東と中央アジアの言語は、アラビア語、トルコ（チュルク）語系、イラン語系の 3 つに大別される。図 4-1 はこの言語分布を示したものである。

図 4-1　中東・中央アジアの言語分布



《トルコ語系》は、中央アジアのステップ地帯から現在のトルコ共和国のあるアナトリア半島にかけて分布している。この言語系の民族はもともと東アジアのモンゴル付近に住んでいた**ステップの騎馬遊牧民**で、中央アジアに進出して勢力を伸ばし、さらにアナトリア半島に勢力を拡大して定住化した人たちである。

《イラン語系》は、イラン、アフガニスタンを中心とした地域に分布し、古代ペルシャ帝

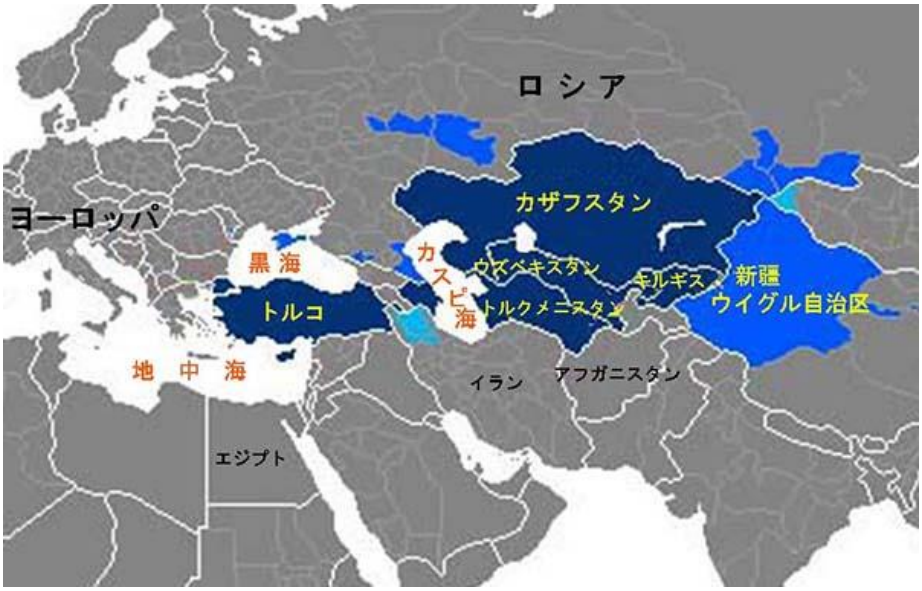
国以来、イラン高原を中心としたオアシスの農業と都市の文明を担ってきた歴史をもつ。

《アラビア語》は、もともとアラビア半島の砂漠気候に住むアラブ人の言語であり、イスラムの拡大にともなって北アフリカとシリアなど東アラブ方面に広がった言語である。

各系統の言語についてもう少し詳しく説明しよう。

まず**《トルコ語系》**は、モンゴル語と同じ**アルタイ諸語**に属している。この言語系の民族は東アジアのモンゴル付近に起源をもち、騎馬遊牧民である諸部族が、7 世紀頃から内陸アジアの広大な草原に向かって移動して勢力を拡大した。さらに 10 世紀末にはイランの王朝を滅ぼし、11 世紀にはそれまでビザンチン帝国（東ローマ帝国）の領域であったアナトリア半島に進出した。そして 14 世紀にかけて農民・牧畜民として定住しアナトリアは徐々にトルコ化して、トルコ語系の民族の領域が拡大していった。

図 4-2　トルコ語系民族が多く住む国と地方



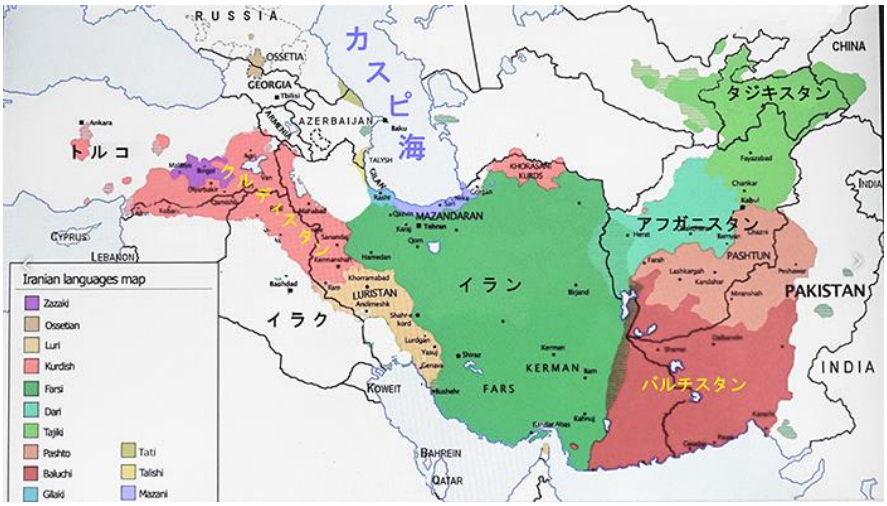
現在、東は中国の新疆ウイグル自治区、中央アジアのカザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、キルギス、それからカスピ海の西のアゼルバイジャンとトルコに、トルコ語系言語の民族が広く分布している。また後に紹介するが、イランにもトルコ語系の言語を母語としている人たちが多数住んでいる。

トルコ語系言語（言語学的には**チュルク語族**という）

トルコ語	トルコ
カザフ語	カザフスタン
トルクメン語	トルクメニスタン、イランの北東部
ウイグル語	中国の新疆ウイグル自治区、中央アジア
ウズベク語	ウズベキスタン、アフガニスタンの北部
アゼリー語	アゼルバイジャン、イラン北西部
カシュガイー語	イラン西部の遊牧民部族
その他	

かつて、トルコの中学校のトルコ史の教科書をみて驚いたことがある。それは、トルコ史の記述がモンゴルからはじまり中央アジアで活躍したトルコ系民族と英雄の物語へと続いていたことだ。トルコの国史とトルコ民族史が重なっていた。トルコ語系民族の結束をはかる政治運動は**汎トルコ主義**というが、トルコ人の中にこうした考えをもつ人が多く、これが教科書に反映しているようだ。

図 4-3　イラン語系諸語の分布



《イラン語系》は、トルコ語系とは異なり言語学的には**インド・ヨーロッパ語族**に属している。ヨーロッパの国々の諸言語またインドのヒンディー語の仲間である。図 4-3 はイラン語系の分布を示している。図 4-1 からトルコ語系の南側に分布していることがわかる。国でいえば、イラン、アフガニスタン、さらに中央アジアのタジキスタン、それにトルコとイラクをまたぐ地域である。

イラン語系言語	
ペルシャ語	イラン
(タジーク語)	タジキスタン
(ダリー語)	アフガニスタン
クルド語	トルコ、イラク、イラン、シリア
バルーチ語	イラン、アフガニスタン、パキスタン
パシュトー語	アフガニスタン、パキスタン

この言語のうち、タジーク語とダリー語はペルシャ語の方言だが、
それぞれの国で呼称が異なっていいる。

言語と民族

北朝鮮と韓国は政治体制が異なり軍事的に敵対しているが、韓国人の多くは北朝鮮の人たちを同じ朝鮮民族、同胞とみている。モンゴルと中国の内モンゴルも同じだ。一方、日本と韓国は古代から人の交流があり顔も似ている。しかし同じ民族とは思っていない。

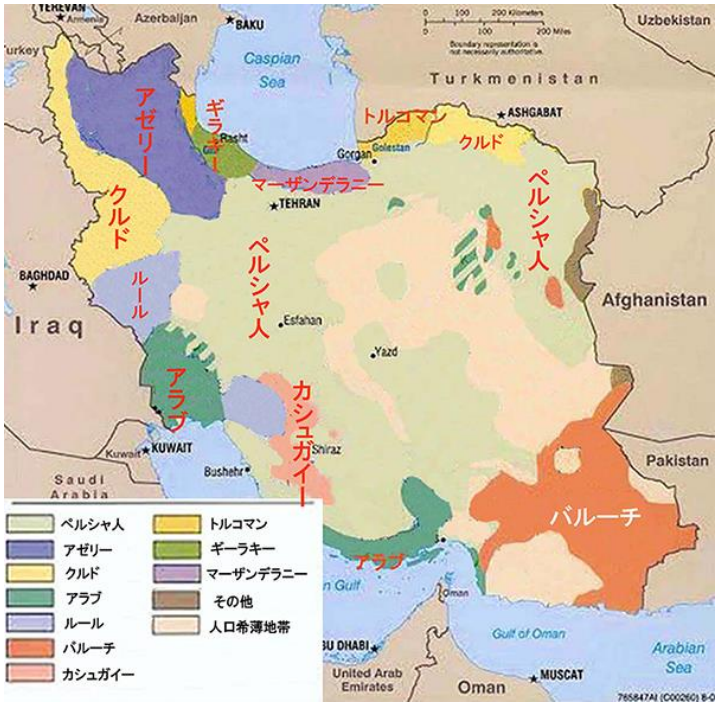
では、民族とは何なのか。一般的には、言語、文化また歴史を共有する人々の集団を民族といっている。日本人は学校で習う日本史を自分たちの歴史だと思っているし、共通の文化の中で暮らしている。また日本という運命共同体に生きている。そして同じ民族と認識するもう一つの重要な要素は言語だろう。同じ言葉を使うことで意思疎通ができ一体感をもつことができるからだ。

民族は国に一つとは限らない。日本も単一民族の国ではない。アイヌもいるし沖縄は琉球処分まで、本土人と歴史を共有していない。琉球処分とは明治になり沖縄が日本に組み入れられたことをいいます。イランの場合、ある言語学者によると 30 以上の言語があるという。トルコもアフガニスタンも言語の数は多く、言語を共有する複数の民族が存在する多民族国家だ。一国家一民族の方が国として統合し易いが、多くの国はそうではない。このため少数派の民族が自治や独立を求め、様々に民族問題を抱えている国が多くある。ここではイラン、アフガニスタン、トルコの３つの国の民族問題を比較してみようと思う。

イラン

図 4-4 はイランの言語分布を示している。多様な言語からなり、とくにイランの北部と西部にモザイクのように分布している。言語系統もイラン語系、トルコ語系、アラビア語と様々だ。イランがこのような多言語地域になったのには、様々な民族や遊牧民が流入し国家の興亡が繰り返された歴史と関係があります。

図 4-4　イランの言語による地域分布



人口でみると、ペルシャ語を母語とする人たちがもっとも多く人口のほぼ半分を占めている。一般に**ペルシャ人**というのはペルシャ語を母語とする人たちである。

次に多いのが北西部の**アゼリー**と呼ばれる人々で人口の約 4 分の 1 を占めている。彼らの母語はトルコ語系のアゼリー語である。イランにはその他に様々な言語を母語とする人たちが数多く住み、ペルシャ湾地方にはアラビア語を母語とする人たち（アラブ）もいる。

先祖代々使ってきた言葉を**母語**というが、母語を同じくする人たちの中には自分たちを同じ民族として意識することがある。国よりも民族に帰属意識を強くもつこともある。このため国を統合していく上で特定の言語を選んで**公用語**とし、学校教育も共通の**国語**で行う必要がある。イランの場合、ペルシャ語が唯一の国語であり、学校でも軍隊でもペルシャ語が使われている。

一つの公用語なり国語を選定するときには必然的に弱小言語の犠牲を強いることになる。しかしイランでは言語にもとづく民族への帰属意識は弱く、イランの国民としての意識の方がはるかに勝っている。かつて 1 年近く住んだことがある村の人々は、よそ者である私とは

ペルシャ語を話したが、住民同士ではトルコ語を話していた。ペルシャ語はイランの国語であり、母語と国語であるペルシャ語の両方を話すバイリンガルだった。国は家庭語、地方語として母語を使うことに寛容であり、彼らは母語による民族意識以上に国民意識が強い人たちであった。

これにはペルシャ語がイランの誇るべき文化であり、言語的な成熟度において圧倒的な地位を占めていることが関係している。ペルシャ語が母語でないペルシャ人以外の人たちにも共有されてきた。加えて同じシーア派のイスラム教徒ということもイラン国民としての統合の重要な要素となっている。ちなみに現在、イスラム体制のもとでの最高指導者ハメネイはペルシャ人ではなくトルコ語系言語を母語とするアゼリーである。

【イラン人の顔】

サヘル・ローズ

イラン大統領（ロウハニ）

南東部に住むバルーチ

トルコ

イランでは「イラン人」は「イラン国民」と同義だが、トルコでは必ずしも同義ではなく、「トルコ人」はトルコ国民であると同時に「トルコ民族」を意味してきた。しかしトルコには沢山の言語・民族が存在している。しかし、第一次大戦後のトルコは、多民族が共存する国ではなくトルコ民族の国として国家建設を行ってきた。このため第一次大戦後に国内に沢山住んでいたギリシャ人をギリシャに送還し、ギリシャのトルコ人を受け入れる民族交換を行い**民族の浄化**をはかった。また国内に昔から住んでいたアルメニア人を追放し虐殺したことは今でも世界で非難されている。

また、トルコの東南部には人口の 20%近くを占めるクルド人が住んでいる。クルド人はイ

ラン語系の民族である。しかし、「トルコにはトルコ人しかいない、クルド人はいない」というのがかつてのトルコ政府の公式見解であった。トルコ人がトルコ国民の意味であれば問題はないが、トルコではトルコ人はトルコ民族のことでもあり、人口の５分の１を占めるクルド人はその存在自体が否定され、クルド人はクルド語の使用や民族的な歌や踊りが禁止され民族的差別を受けてきた。こうした政策は国際的にも大きな批判を受け、現在では改善をみているが、反発するクルド人の武装闘争と弾圧が繰り返された歴史が現在もなお続いている。

（中央アジア系）

（東欧系）

クルド人

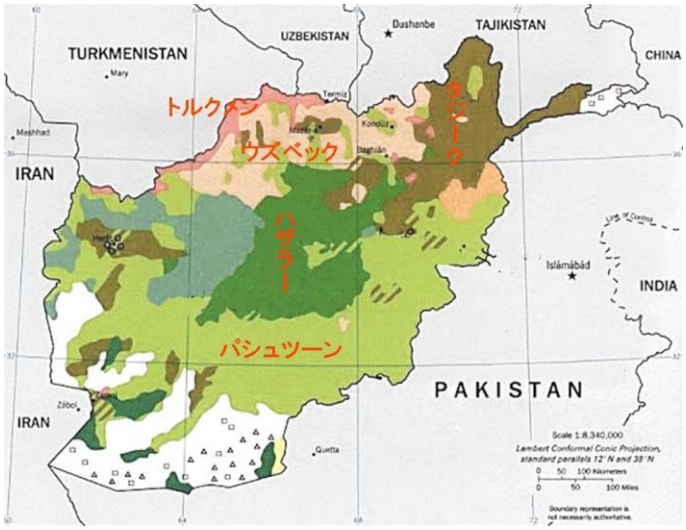
クルド人

クルド人は人口が約 3000 万人、国をもたない最大の民族といわれる。

図 4-5 図はクルド人の居住地域、クルド人の国**「クルディスタン」**と呼ばれているところである。しかし、クルド人の国は存在せず、クルディスタンはトルコ、イラク、イラン、シリアの国境によって分断され、クルド人はそれぞれの国における少数民族の位置におかれている。

図 4-5　クルド人の居住する地域

図 4-6 アフガニスタンの言語・民族分布



アフガニスタン

アフガニスタンの場合、パシュトゥーン、タジーク、ハザラ―、ウズベクの４つの言語・民族がある。1979 年に旧ソ連がアフガニスタンに軍事侵攻した時には、それぞれの民族が共通の敵に対して戦い、旧ソ連軍の撤退を勝ち取った。また現在イスラム原理主義組織である**タリバン**が勢力を拡大し国土の半分ほどを実効支配している。これに対して各民族のリーダーは相互にライバル意識をもちながらも、共同して戦ってきた。

政治的には人口の４割を占めるパシトゥーンが支配権を握ってきたが、地方は民族的･部族的意識が強く、多民族国家としての性格をもっている。多数派である民族の 2 つの言語、パシュトゥーン語とダリー語（ペルシャ語）がアフガニスタンの公用語になっているが、この２つの言語以外を母語とする地域では、その民族の言語も３番目の公用語にすることができると憲法に記され、多言語・多民族の現状に配慮がなされている。

	人口の割合	言語
パシュトゥーン人	45%	パシュトゥー語（イラン語系）
タジーク人	32%	タジーク語（ペルシャ語　イラン語系）
ハザラ―人	12%	ハザラギ語（ペルシャ語　イラン語系）
ウズベク人	9%	ウズベク語（チュルク語系）
トルクメン人		トルクメン語（チュルク語系）

【アフガニスタン人の顔】

パシトゥーン（カルザイ元大統領）

エメラルドの目をもつパシトゥーンの少女

ハザラ―（モンゴル系、ジンギスカンの子孫とされている）

アラビア語とアラブ人

中東で人口がもっとも多いのがアラブ人だ。「アラブ人」は、私たちが日本人というのとはだいぶ違う。日本人とは日本国籍をもつ人たちのことであり、アメリカ人も同様にアメリカ国籍をもつ人たちをいいます。アメリカ人の中にはヨーロッパ系やアフリカ系、アジア系またヒスパニックの人たちもいるが、アメリカ国籍をもっていればアメリカ人である。

しかし、アラブ人はアラブという国の国民ではない。そもそもアラブという名の国は存在しない。だがアラブ諸国という言い方はあります。通常はアラブ連盟に加盟している 20 数か国を指すが、これらの国の国民はエジプト人とかシリア人という。またイランに住むアラビア語を母語とする人たちはイラン人だが、民族としてアラブ人ともいっている。

図 4-7　アラブ連盟に加盟するアラブ諸国

では、アラブ人とは何なのか。これを定義すると、「**アラブ人とはアラビア語を母語とする人々**」となる。国民の概念とは異なる。しかしこれらのアラブ諸国に住みアラビア語を話しても、自分たちをアラブ人と思っていない人たちもいる。

中東にはイスラム教以外の宗教を信じる人たちも住んでいる。たとえばレバノンでは人口の 40%近くがキリスト教徒、エジプトも 1 割弱がコプト教徒（キリスト教徒）だが、これらの人たちの中には、自分たちをアラブ人と思っていない人もいる。

つまり、アラブ人というときにはイスラム教徒であることも要件となり、イスラム教徒でない集団はアラビア語をはなしても狭義のアラブ人とはいわないことが多い。したがって、「**アラブ人とはアラビア語を母語としイスラム教に帰属している人々**」と定義できる。

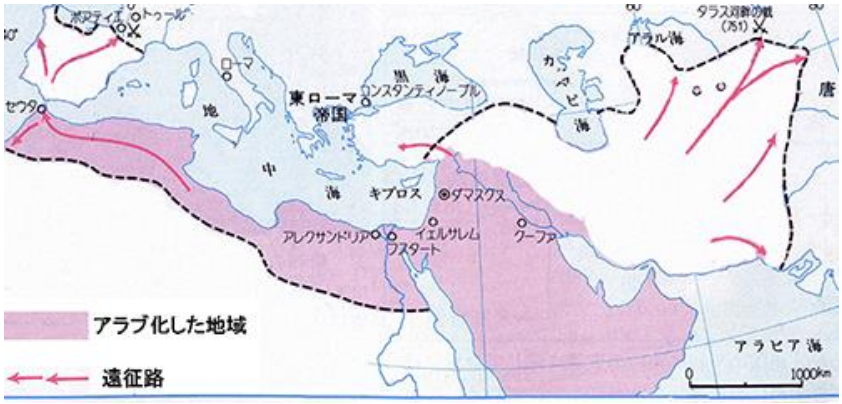
図 4-8　アラブ人の居住域

中東でアラブ人はどこに分布しているのか。図 4-8 はそのおよその分布を示している。地図に赤線が引かれているが、この線の下（南）がアラブ人のおよその居住範囲である。微妙なところはトルコ、イラン、イラクで、トルコでは東南部の一部に、イランではペルシャ湾に沿ったところにアラブ人が多く住むところがある。アラブ人が多数派のイラクでは北部にアラブ人ではない人々（クルド人）が多く住む地域が、また東地中海地域にユダヤ人が移住したイスラエルがある。

もともとアラブ人とはアラビア半島に住んでいた人々のことだった。アラビア半島のアラビア語を話す遊牧民や商人などだ。エジプトにはエジプト人、また北アフリカのマグレブ地方にはベルベル人などが住んでいたし、イラクにはアッシリア人などメソポタミア人といっていい人たちが住んでいた。

アラブ人が現在のような地域的な広がりをもって分布するようになったのはイスラム教の誕生と深い関係がある。イスラムの発展については前回簡単に触れたが、イスラムの誕生後、イスラム教徒となったアラブ人による征服戦争がはじまる。そのスピードは速く、イスラム暦元年（西暦 622 年）からわずか 20 年でエジプトを征服し、現在のイランの東まで征服地を拡大、また 90 年後には北アフリカからイベリア半島（現在のスペイン）の征服がはじまっている。

図 4-9　8 世紀のイスラム帝国の拡大とアラブ化した地域



この征服戦争の戦士がアラビア半島のアラブ人であり、征服地で支配者集団になっていった。多数のアラブ人戦士が家族を率いて征服地に移住し、その数は 7 世紀末に 130 万以上になるともいわれている。この征服地のアラブ人は軍事都市（ミスル）に多く住み、もともと

の住民のイスラム化とアラブ化を進めた。この過程でアラビア語の領域も広がっていく。

ただ、アラブ化がすぐに進んだのではない。エジプトでは人々がアラビア語を話すようになったのは征服から 500 年ほど経ってからといわれている。ナイル流域が豊かな農業地帯であり人口密度も高かったため、アラブ化がなかなか進まなかったと考えられる。

また図 4-8 に戻って地図をよくみると不思議なことに気づく。アラブ人の分布が降水量の少ない砂漠気候のところにほぼ一致し、イランやトルコではイスラム化は進むがアラブ化していない。

これには地理的要因も関係している。砂漠の遊牧民起源のアラブ人にとって砂漠とは異なる気候と地形が不得意であったことに加えて、この地域ではその後、アラブ人以外の集団、イラン系、トルコ系、モンゴル系の国家や帝国が興亡したことが大きく関係している。またイランの場合、イラン系の人々がアラブ人と異なり農耕民族であり文化的に優れていたこともあってアラブに同化しなかったことも関係していると思われる。

アラビア語は、これを母語とするアラブ人の言語だが、イスラムの聖典コーランがアラビア語で書かれていることで、イスラム教徒の間では特別な言語とされている。イスラム教の信者はアラビア語で礼拝するように義務付けられている。また原則コーランは他言語に翻訳できないことになっていて、アラビア語は全世界のイスラム教徒の宗教語となっている。日本の「こんにちわ」に相当するアラビア語の挨拶「サラーム・アレイコン」はアラブ世界に限らず全国のイスラム教徒の多い国で共通に使われている。

また商業用語としても、アラビア語は歴史的に大きな影響を他の言語に与えてきた。トルコ語やペルシャ語のなかにアラビア語由来の単語が沢山ある。

文字への影響もある。ペルシャ語はアラビア文字を使っている。トルコ語も 1928 年の文字改革でアルファベットに改められるまではアラビア文字を使っていた。

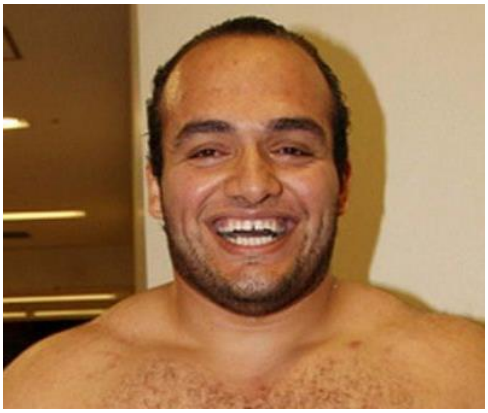
話しをアラブ人に戻すと、アラブ地域に住む人が昔から自分たちをアラブ人だ、と意識していた訳ではない。広い世界を知ることがなかった昔の人たちは、自分を「アラブ人だ」などと思わなかった。

日本の例でいえば、江戸時代まで、日本の各地に住む人たちが自分たちを日本人として意識することはなかった。加賀の人、薩摩の人であっても日本という土地に住む日本人だと意識することはなかった。黒船がやってきて大騒ぎになり強い危機感をもって始めて自分たちが住む日本を認識することになった。

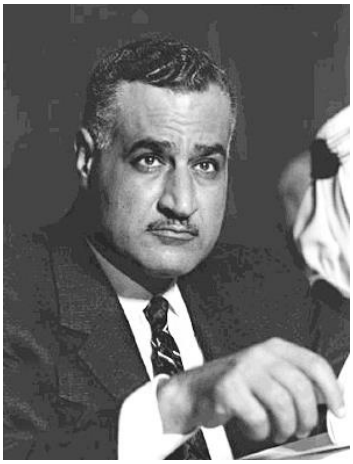
アラブ世界もこれと同じで、19 世紀になってアラブの地域はヨーロッパの列強によって次々に切り取られ支配された。この危機に直面して人々の間に民族意識が強まり、同じアラビア語を話す人々の間にアラブ人意識、同じ民族としての意識が生まれることになった。

【アラブ人の顔】

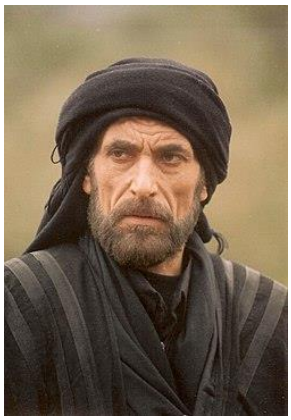
アラビア半島、エジプト、シリアなど、地域で顔立ち、顔の色、背丈が異なる



エジプト人（大砂嵐）



エジプト人（ナセル元大統領）



シリア人

シリア人

サウジアラビア人